

## 史談

2010 (H22) 1・20

## ■ 明けましておめでとうございます

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いたします。年があけて、あちこちの集落でサイトウ焼きが行われました。各地の神社や寺では新年のご祈祷や「お大般若」も始まります。雪もようやく峠を越えたような感じですが、まだ寒中ですから油断はできません。

## ■ 役員会の報告

さる1月15日、役員会が行われ、史談会の研究発表会と懇親会を2月20日の1時半から中央公民館で行うことになりました。

今回の研究発表は金田茂也氏の「白鷹町の養蚕業」、菅野志郎氏の「最上川舟運と幻の左荒線を歩く」です。なお、その後の懇親は会費 2,000 円で、参加は自由です。2月10日まで、教育委員会の船山さんあてに申し込んでくださるようお願いいたします。

## ■ 『史談』の原稿を募っています

現在、史談会では『史談』26号の原稿を募っています。内容は各自の自由なテーマでかまいません。今回は一人分をタイトル、写真込みで6ページとしますが、テーマによってはその限りではありません。

また、この会報の原稿も随時、受け付けています。こちらは800字程度で、内容は問いません。気軽に身のまわりのことを書いてください。

## ■ テレビでおなじみの「なんでも鑑定団」

が4月25日に山形にくるのにあわせて「お宝」を募集しているそうです。この機会にお手元にある「お宝」を鑑定してもらいたいという方はいませんか。2月10日までの申し込みだそうです。申し込みなどについてのくわしくは事務局の船山さんまで。

## ■ 諏訪堰を歩く 5 守谷英一

## 11 農道に沿い、耳堂川に合流

西に向かった水路は道路に沿って立ち並ぶ家々の間を縫って、国道旧道を越え、昔の東根中学校であった東陽公園のグランド南端に沿って流れ、さらに国道287号線を潜る。

国道の西には農道が並んで走っている。水路はそれもくぐり、道路の端に顔を出す。そして、農道に沿って、北に向かって流れる。



そのまましばらく道なりに流れていた水路は、間もなく道端からそれ、水田の中をまっすぐ流れ始める。その先には耳堂川の堤防が見えている。

堤防にぶつかった水路は、しばらく堤防に沿って流れるが、100メートルほど流れたところで水門を潜り、耳堂川と合流する。諏訪堰の終点の一つである。

ここまで、約3時間30分。約7キロメートル近い流れである。耳堂川もまた数百メートル流れた後には思川と合流し、最上川に注いでいる。



## 12 歩くこと

歩き終わって家までたどり着くと、さすがに膝

ががくがくした。12キロメートル以上歩いているのだから当然である。全く物好きな話だ。

しかし、歩いてみると思いがけない収穫がある。実際に歩いてみてわかったのだが、森の集落を流れる川（諏訪堰がサイホンで越えている川）から耳堂川までの間には、川らしい川は一本もない。だから、水田耕作には不向きな土地だった。

車で走ったのではそれはわからない。森から耳堂川まではわずか5分程度の時間しかかからないからだ。しかも、いちいち渡る橋の数を数えていないし、川なども意識しない。歩いてみて初めてわかったことである。

その他、堰の周辺にある様々なものにも目が向いて行く。馬の手入れをする施設や妻圖神社の石碑なども今回初めて気が付いたことである。だから、歩いて見る速度はよい速度ということになるだろう。

今回は広野の集落の堰をきちんと見ることはできなかった。また四季折々に堰はちがった表情を見せているのだろう。特に、農繁期の堰の様子も見ることはできなかった。堰が生きている姿をとらえられなかった。今度は季節を変えてまた歩いてみようと思っている。

2009. 3. 19

## ■ 冬至の雨

「政権交代」などで世の中は変化も激しく予測不能なことが多いが、季節は多少の時期のズレや変動の中はあっても、春夏秋冬は確実に訪れる。それに対応して草木や鳥や動物も生きているのが自然の成り立ちである。

白鳥は11月21日に見たが、さて「モズの高鳴き」はいつだったか、陽気がいいのは体が助かるが、畑の野菜が育ちすぎ、漬物が酸っぱくなるという。干し柿は乾いた風が吹いて、たいいてい良くできたとか。どれも相手がお天気だからむずかしい。庭先には「枇杷の花咲く年の暮れ」という言葉の通り、枇杷が小さな白い花いっぱいつけ、甘酸っぱい香りを漂わせている。

冬至が近くなると「小豆カボチャ」を作っては何軒かの家で食べ比べ、「裸餅つき」のようすが

テレビに映ると、年の瀬を感じつつなんとなく気ぜわしくなるのも毎年のことである。

このあたりの年寄りたちが言い習わしてきた言葉に「冬至冬中」というのがある。二十四節気のひとつである冬至は一年中で太陽が一番南に傾き、昼の時間がもっとも短いとされている。

冬の一番寒い時期は小寒、大寒であり、冬至はその前にある。「冬中」はかならずしも実際の気候とは一致していないが、それでも暦の上では「大雪」の最中であり、冬はそこからが本番である。ただ、昔は今よりもはるかに正月前の雪が多く、何度も雪下ろしをしたものだった。

この冬は12月になってからもしばらく暖かい日が続き、「正月は雪がないのでは・・・」などといっていたら17日の夜から4日間降り続いた。はじめは軽いフワフワした感じの雪が途中から気温が上がり、湿気の含んだ重たい雪に変わった。そのために電話線が太くなって垂れ下がり、背の高い車が引っ掛ける事故が多発した。そして肝心な冬至には雨降りである。雪囲いをしない梅や桜の太い枝もあちこちで折れた。このあたりではあまり見ない光景である。暮れから正月3日にかけて降り続いた雪も相当な量だった。

それでもこのあたりの人たちは、冬至が過ぎると「ワラの一節づつ日が伸びる」といって太陽を拝んできたのである。気のせいかもしれないが、冬至を過ぎて一週間もすると太陽の光に力強さを感じることもある。やがて正月を過ぎると誰ともなく「日が伸びたなあ」とあいさつを交わすようになる。しかしその間にも雪は降り続き、「やっぱり心配なく降るものだ」といいながら雪かきに追われるのである。

冬の夜中に星空を見る人はそういるとも思えないが、冬の空は空気が澄んでいるので星の輝きが夏とはまるで違うものである。北の空には北極星を中心にカシオペアや北斗七星、東から南の空にかけてはオリオンやスバルといった星たちが光っている。かつて「冬はすばる・・・」といった平安時代の女人もこれらの星を見たと思うと、今の人間の生きている世界とは別の時間の流れがあるように思えてくるのである。(川)